

『フィシオログス』(ベルン318番写本)に関する一考察

水島ヒロミ

はじめに

主に中世イギリスでさかんに作られた「動物譜 (Bestiary)」のテキストを構成する重要なテキストの一つが『フィシオログス (Physiologus)』である。私たちはあるテキストのグループをこの『フィシオログス (自然を知るもの)』という名前と呼んでいるが、いつ誰が書き残したテキストであるのか、著者は一人なのか、複数なのか、具体的なことは現在も不明である。ただし、最初にギリシア語で書かれ、それがアルメニア語やシリア語など様々な言語に翻訳され、広く普及したテキストであるという点については異論は出ないだろう。一般的には『フィシオログス』のテキストは紀元2世紀ごろギリシア語圏のアレクサンドリアで成立し、その後複数の言語に翻訳されたと見なされている。しかしギリシア語テキストは後世の写本にしか現存せず、ある一冊のギリシア語テキストが後に派生したすべてのテキストの原本であるかどうかも含め、テキストの成立状況について知り得ることはきわめて少ない⁽¹⁾。

ギリシア語の『フィシオログス』は翻訳されてラテン語文化圏に広がり、これにイシドルスの『語源』やアンブロシウスの『ヘクサエメロン』など様々なテキストが加えられ、後に「動物譜 (Bestiary)」と呼ばれるテキストに膨らんでいく。動植物や鉱物についての特徴や性質を書き記したテキストであるなら、ラテン語圏に限ってみても、プリニウスの『博物誌』のようなより浩瀚なテキストがすでに書かれていた。『フィシオログス』はなぜそれほど広範囲に普及したのだろう。

この書は、いわゆる自然科学書とは異なる。むしろ動物等のそれぞれの性質についての簡潔な、そして怪しげなテ

キスト、私たち人類がかつてどこかで共有していた、しかしすでにおぼろげな、様々な神話や迷信に連なる民間伝承や、古代の著作家が書き残した種々の文字記録などから編纂されたテキストがまずあり、加えてそのキリスト教的な意味や教訓が、聖書からの章句の引用とともに、もしくは章句を想起させるような言葉によって述べられている。言葉を換えれば『フィシオログス』は単なる道徳的な寓意の書であるにとどまらず、キリスト教的な意味付けによって形作られたある種の世界観を示していると言えるだろう。もともと、その意味を解き明かすはずのテキストは分かりにくく、当惑させられることも多い。

『フィシオログス』のいわゆる「ベルン318番写本」(ベルン市立図書館、Codex Bongarsianus 318)は9世紀前半に作られたとみなされており、挿絵入りのラテン語版『フィシオログス』としては現存する最古の写本である。テキストに劣らず、半人半蛇のママシ、毛むくじらの太陽トカゲ、とぼけた顔のサラマンドラなど、挿絵は挿絵で謎めいている。本稿では「動物譜 (Bestiary)」写本についての研究と関連して、この『フィシオログス』写本の主にヘビとアリの項目について、気づいた点を以下に述べる。

1 「ベルン318番写本」の『フィシオログス』について

この写本自体は131フォリオから成り、『フィシオログス』はフォリオ7から22までを占める。インキピットの記載などはなく、いきなり挿絵の次にテキストが始まる。例外はあるが、テキストに先行して挿絵が描かれており、挿絵とテキストは次の

ように展開する。以下の番号は挿絵についてのナンバリングである。それぞれの項目は朱書きの小見出しを伴う場合もあれば、項目本文の冒頭が1行朱書きされる場合もある。朱書きされない場合もあるので、全体としては統一を欠いている。さらに項目の小見出し自体の表記も統一されていない。たとえば、ヒョウの場合、DE ANIMALE QUI DICITUR PANTHER（ヒョウと呼ばれる動物について）と表記されているが、雄ジカの場合はDE CERUO（雄ジカについて）としか表記されていない⁽²⁾。

1. ライオン(7r.) テクスト: 7r. **EST LEO REGALIS OMnium...**
2. ライオンの第1の性質(7v.) テクスト: 7r. (Prima natura leonis...)
3. ライオンの第2の性質(8r.) テクスト: 8r. (Secunda natura leonis...)
4. ライオンの第3の性質(8r.) テクスト: 8r.-8v. (Tertia natura leonis...)
5. 太陽トカゲ(8v.) テクスト: 8v. **DE NATURA ANIMALIUM AESAURE**
6. カラドリウス(8v.) テクスト: 9r.-9v. **DE NATURA UOLATILE QUAE DICITUR CALATRIUS**
7. ペリカン(9v.) テクスト: 9v.-10r. **DE NATURA ANIMALIUM ET NOCTICORACOS**
8. ニクティコラクス(10r.) テクスト: 10r.-10v. **DE NOCTICORACIS**
9. ワシ(10v.) テクスト: 10v. **DE NATURA UOLATILE AQUILE**
10. ヤツガシラ(11r.) テクスト: 11r. **DE NATURA UOLATILE QUE DICITUR YPPOPUS**
11. マムシ(11r.) テクスト: 11v. **DE NATURA UIPERAE**
12. ヘビの第2の性質(11v.) テクスト: 11v.-12r. **DE NATURA SERPENTIS SECUNDA**
13. ヘビの第3の性質(12r.) テクスト: 12r. **DE TERTIA NATURA SERPENTIS**
14. ヘビの第4の性質(12v.) テクスト: 12v. **DE QUARTA NATURA SERPENTIS**
15. アリの性質(12v.) テクスト: 12v. **DE NATURA FORMICAE**
16. アリの第2の性質(12v.) テクスト: 12v.-13r. **DE NATURA FORMICES SECUNDA**
17. 小さいアリ(13r.) テクスト: 13r.-13v. **DE FORMIACA EXIGUA**
18. セイレーンとオノケンタウルス(13v.) テクスト: 13v.-14r. **DE NATURA SERENA ET HONOCENTAURI**
19. ハリネズミ(14r.) テクスト: 14r.-14v. **DE NATURA YRICII**
20. キツネ(14v.) テクスト: 14v.-15r. **DE NATURA UULPIS**
21. ヒョウ(15r.) テクスト: 15r.-15v. **DE ANIMALE QUI DICITUR PANTHER**
22. アスピドケローネ(15v.) テクスト: 15v. **DE CETO MAGNO ASPIDOHELUNES**
23. アスピドケローネの第2の性質(16r.) テクスト: 16r.-16v. **DE NATURA SECUNDA PISCIS**
24. ユニコーン(16v.) テクスト: 16v.-17r. **DE ANIMALE UNICORNIUM**
25. 雄ジカ(17r.) テクスト: 17r.-17v. **DE CERUO**
26. サラマンドラ(17v.) テクスト: 17v. **DE NATURA ANIMALIS QUI DICITUR SALAMANDRA**
27. ペリデクシオン(17v.) テクスト: 18r. **DE ARBORE QUI DICITUR PEREDEXION**
28. アンテロープ(18r.) テクスト: 18r.-18v. **DE ANIMALE QUI DICITUR ANTELUPS**
29. セラ(18v.) テクスト: 18v.-19r. **DE NATURA PISCIS MAXIMO QUI DICITUR SERRA**
30. ゾウとマンドラゴラ(19r.) テクスト: 19r.-19v. **DE ELIFANTO ET MANDRAGORA**
31. ゾウ(19v.) テクスト: 20r. **NATURA AUTEM ELIFANTI TALIS EST**
32. メノウと真珠(20v.) テクスト: 20v. **DE LAPIDE ACATO**

33. インド石 (21r.) テキスト: 21r. **DE LAPIDE INDICO**
 34. 雄どり (21r.) テキスト: 21v.-22r. **DE GALLI CANTU**
 35. ウマ (22r.) テキスト: 22v. (Cabollus…)

テキストは1ページ23行の1段形式で記されており、カロリング書体が用いられている。

NO.17と34のテキストはアンブロシウスの『ヘクサエメロン』からの、NO.35のテキストはイソドルスの『語源』からの抜粋である⁽³⁾。

その他のこの写本のテキストは、分類上C版と呼ばれており、『フィシオログス』のテキスト中で扱う項目の少ないテキストである。いくつかの項目で部分的にY版の記述と一致することがある。ちなみに後世の「動物譜」はB版やY版に多くを負っている⁽⁴⁾。

NO.7はペリカンと表記したが、これはテキストの内容に従った。その小見出しはペリカンについて言及しておらず、また挿絵に描かれている鳥の姿はNO.8の挿絵と同様で、明らかにペリカンではない。NO.23は小見出しでは「サカナの第2の性質」となっているが、NO.22の続きである。

挿絵は、特に人物の表現から判断して、様式上ランス派の影響が顕著であり、その彩色や、背景などに、古代末期の絵画から受け継いだ特徴を見ることが出来る⁽⁵⁾。大半は画面枠を持ち、文字欄の横幅を少し超える程度の矩形の画面に描かれている。画面枠を持たない挿絵はNO.12、14、15、16、17、26、27、28、33、34である。特にNO.14、15、16については文字面との挿絵の関係がわかりにくく、全体の流れを中断している。またNO.31の「小さなゾウが大きなゾウを助ける」という記述内容のテキストに対する挿絵は、向きが90度左回りに回転している。つまり、一冊の挿絵入りの写本としては完成度の低い写本になってしまっている。その原因の一つとして、手本とした写本自体にもともと一貫性がなかったためと考えられるが、こうした一種の混乱が起きているということは、様々な挿絵入りの写本や、手本にできる動物の画像が、手本となった写本にせよ、この写本にせよ、新たに構想された際にその周辺にあったということだろう。

2 ヘビ (NO.12、13、14) の項目について

「ベルン318番写本」のヘビについての項目では、Y版で第1の性質として記述されている内容が第2の性質として記述されている。既に記したように、ベルン写本ではヘビの第1の性質という項目がない。Y版での第2の性質は、このC版では第3の性質として記述されており、Y版の第3の性質についてはここでは省かれている。Y版にあるのは第1から第3までの3性質である。ちなみに後世の「動物譜 (Bestiary)」が取り上げたヘビの性質はY版の3性質である⁽⁶⁾。

NO.12(ヘビの第2の性質)のテキストは以下の通りである。

「福音書の中で主が申されている。ヘビのようにかしこく、ハトのように素直であれ。フィシオログスはそれについて見事に語っている。ヘビは4性質を持つ。ヘビの性質は次の通り。年を取り、目がかすみ、若くなりたいと思うと、節制し、皮膚がだぶついてくるまで、40日間、昼夜食を断ち、さらに狭い割れ目のある岩を探す。そして無理矢理通り抜け、体を押し付けてからを脱ぎ、ふたたび若返る。それゆえ人であってもヘビのかしこさを認め、この世の古い皮を脱ぎ捨てなければ、まずは断食によって肉体を打ち、狭く苦しい場所を通り抜けるのである。永遠の生命に通じる道は狭く苦しい⁽⁷⁾。

このテキストに対する挿絵(図1)は、顔料の剥落がすすんでおり、分かりにくくなっているが、岩を通り抜けるヘビの姿が見てとれる。ヘビは舌を出し、体は波打っている。だぶついた抜けがらは現状からは把握しにくい。この挿絵に画面枠はなく、わずかに土坡と植物が描き添えられている。



図1 NO.12 ヘビ ベルン市立図書館 cod.318, f.11v.

テキストの「岩」は岩というよりも、祭壇のような切り石である。ベルン写本での岩が、祭壇を想起させるところから、アガトダイモンとしてのヘビの表現が転用されたのではないかと考えられている。古代ローマ時代のヘビに対するイメージが生き延びている例である。このヘビの項目はヘビの賢さに言及はするが、ヘビに対する「邪悪」や「邪淫」という意味付けとは無関係で、ヘビの習性から教訓を引き出しているにすぎない⁽⁸⁾。

ヘビがからを脱ぎ捨てるという記述は、プリニウスやアエリアヌスに見られるように、古くからの伝承に従っているのだろうが、40日間の断食というのは、聖書の記述に影響された部分と見られている。また、ベルン写本ではマタイ伝7章14節の「狭き門」という言葉は使われてはいないが、この言葉が使われているY版テキストをそのテキストに含む「動物譜 (Bestiary)」の挿絵 (図2) では、門のような建造物のすき間をヘビが通り抜けている⁽⁹⁾。

NO.13 (ヘビの第3の性質) についてのテキストにはこう書かれている。「泉に水を飲みに来る時には、毒をもって来ないで穴かねぐらに置いておく。神聖な神の言葉で満たされた永遠の水の上を急ぐ私たちは、教会に悪しき毒を持ち込んではならない。つまり非のうちどころのない全きものは汚れた欲望に勝るのだ」⁽¹⁰⁾。



図2 ヘビ オックスフォード、ボドリアン図書館 MS Ashmole 1511, f.84r.

このテキストにおいてもヘビ自体は悪しき生き物としては語られていない。画面枠の内側の挿絵 (図3) が示すのは、螺旋状に身をねじらせた二匹のヘビが画面右下の泉で水を飲む姿である。前の項目のテキストの最後が余白に筆写されており、挿絵が文字よりも前に描かれていたことが分かる。



図3 NO.13 ヘビ ベルン市立図書館 cod.318, f.12r.

Y版のテキストではこの後、ヘビが裸の人間を見た場合には、恐れを抱くが、着衣であれば襲ってくる、という内容の記述が続く。第3の性質として「動物譜 (Bestiary)」に含まれるのはこの記述である。

NO.14 (ヘビの第4の性質) については「人が来てヘビを殺そうとすると、ヘビは胴体全体は引き渡すが、頭部は守る。私たちが誘惑の中にあつて、肉体はゆだねても頭は守らなければならない。キリストを拒否するのではなく、あたかも殉教者たちがそうであったように。なぜならすべての人の頭はキリストだからである」と述べられている⁽¹¹⁾。

このテキストとその挿絵を含む紙葉 (図4) は、このベルン写本の『フィシオログス』中で唯一文字欄と挿絵の関係が曖昧になった箇所である。他の紙葉の挿絵は文字欄の幅にはほぼ一致して描かれているが、この項目と次のアリの項目で、文字部分は挿絵に空間を譲り、後退して、狭く右に寄せられている。挿絵では、男がヘビの胴体と首を、槍状のもので刺し貫いており、かろうじて頭部をはずしている。『語源』には、頭から約4cmほどのところであれば傷を負っても生きており、頭部を守るために、攻撃してくる相手に全身をさらす、と記されている。挿絵のヘビが微妙な位置で刺し貫かれ

ているのと合致する⁽¹²⁾。男とヘビの間に描かれた黒い斑点は、この項目にはなく、次のアリの項目と関わりがあるのだろう。他の挿絵にこのような斑点のある土坡は現れないからである。



図4 NO.14, 15, 16 ヘビとアリ ベルン市立図書館 cod.318, f.12v.

3 アリ (NO.15, 16, 17) の項目について

ヘビの項目に続くアリについては3項目で語られているが、Y版とB版での第1の性質についての記述はこのC版にはない。Y版とB版での第2, 第3の性質がここでのNO.15(アリの性質)とNO.16(アリの第2の性質)である。

NO.15(アリの性質)のテキストにはこう書かれている、「地中に小麦を保存する時、粒を二つに割る、冬にしまいで

いるところに、たまたま雨が流れ込んで粒が発芽し、飢えて死んでしまわぬよう。そして旧き契約の言葉を霊的な理解へ、いつか言葉で殺されないように。律法は霊的なものである、とパウロは言っている。つまりユダヤ人は肉적인ものだけに目を向け、飢えて断たれ、預言者の殺人者となったのである」⁽¹³⁾。

このテキストの解釈部分は分かりにくい。ちなみにY版の第2の性質ではこの部分は「古い契約の言葉と新しい契約の言葉を分けなさい、霊的な事と肉적인事を分けよということである。文字が発芽してあなたを殺さないように。使徒パウロはこう言っている、律法は霊的なものである、と。そしてこうも言っている、文字は殺すが霊は生命を与える、と。そして生命を与えるのはふたつの契約である。しかしユダヤ人は文字だけに注意を払い、飢えて滅びた、そして預言者と神の殺害者となった…(後略)」⁽¹⁴⁾と説明されている。

ベルン写本の第1の性質に対する挿絵が、斑の土坡に見えている部分なのではないのだろうか。また、ベルン写本には書かれなかった性質、つまりY版での「第1の性質は列をなして歩き、それぞれが口で穀物を運ぶことである。持たない者が、あなたの穀物を分けて下さいなどと言うことはない、先に進む者の跡をたどり、穀物が見つかった場所まで行き、穀物を手に入れ巣まで持ち帰る。…(後略)」⁽¹⁵⁾というアリの性質に、ベルン写本の右手に描かれた、麦の間を行き来するアリは対応しているのではないのか。

次のNO.16(アリの第2の性質)のテキストは次の通りである。「刈り入れ時に時々畑に出かけて穂に上り、その粒を下へ運ぶ。上に上る前に下で匂いを嗅ぎ、香りの高さで大麦か小麦かを嗅ぎ分け、もし大麦なら放っておき、小麦なら上にのぼる。大麦は家畜のえさだが、穀物倉に蓄えるべく小麦は引き受ける。つまり大麦は間違った教えに、小麦は正しい霊的な信仰になぞらえられる」⁽¹⁶⁾。

このテキストの左に描かれた挿絵では、一本の麦の茎にだけ次々とアリがよじ上っている。

このように見てくると、フォリオ12vには挿絵とテキストに混乱の見られることが分かる。

次の紙葉にもアリのテキストと挿絵が描かれている。NO.17の小見出しをそのまま読めば、DE FORMIACA EXIGUA(小さきアリについて)と朱書きされている。ところが、これはアンブロシウスの『ヘクサエメロン』から引用される際、Exigua est enim formica, quae majora suis audet…の文頭の一語を移動してしまったのである。この項目のテキストは『ヘクサエメロン』第6書4の16からの引用である。

「アリは小さな生き物ではあるが、より大きな力を発揮する。奴隷の様に仕事に駆り立てられているわけではなく、むしろ先々を見越して食料を蓄える。聖書はアリの勤勉さを見習う様に戒めている。聖書はこう言っている、『アリをよく見よ、怠け者よ、彼らの道を見習い、もっと賢くなれ』。アリは、耕作地を持たず、誰かに駆り立てられられることもなく、主人の下で何とかして食料を集めてくるということもない。アリはあなたの働きから、収穫物をしまい込み、あなたが欲望ではちきれそうになっている時、アリは何も欲しがらない。アリにとって閉めきった穀物倉はなく、突破できない見張りもいなければ、もぐり込めない穀物の山もない、管理者は盗みを見てもとがめず、持ち主は彼の損失を考えても、仕返しをしようとはしない。戦利品は黒い行列で、畑を運ばれていき、その道筋は旅するものの一団で沸き立っている、口ではくわえきれない大きな穀物が彼らの肩で運ばれていく。収穫物の持ち主がすっかりこれを見て、そのような懸命の働きによるつましい蓄えをとがめるなどは赤面ものである」⁽¹⁷⁾。

この引用部分は、かつてウッドラフやフォン・シュタイガーによって、訳の分からないテキストと見なされていた。ちなみに「動物譜(Bestiary)」では『フィシオログス』のアリの3性質についてのテキストに『ヘクサエメロン』のテキストが2カ所から引用されて加わっている⁽¹⁸⁾。

このテキストの前に置かれた挿絵(図5)は文字欄の幅一杯に描かれており、左にはアリの集った穀物の山、中央と右には、麦の穂に上ったり、地面を歩いたりしているアリが描かれている。この挿絵にも画面枠はない。

この挿絵の雰囲気はこのテキストでは分かりにくい。挿絵と詩句との直接の影響関係を云々するつもりはないが、か

つて諷んで詠じられていたはずの『アエネーイス』第4巻402～407行の詩句と響き合う。

「……………あたかも蟻が来る冬を、
思って大きい穀物の、山を掠めて巣にかくし、
黒い群れなし野をあるき、草の間の細径を、
辿って獲物を運び込み、一部は肩で嵩だかい、
穀粒押しして力入れ、一部は群れを督励し、
遅れるものを鞭撻し、小径は作業で湧き返る」⁽¹⁹⁾



図5 NO.17 アリ ベルン市立図書館 cod.318, f.13r.

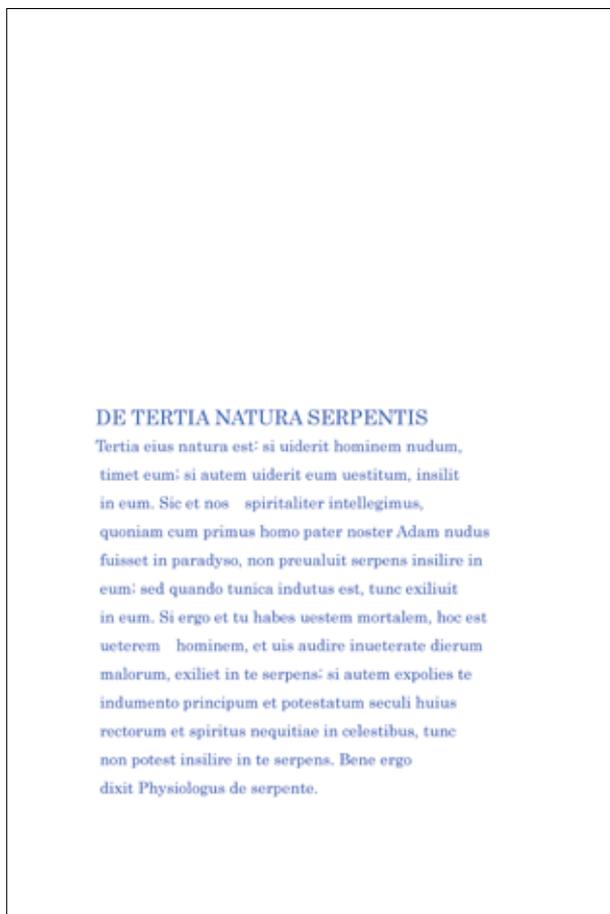
おわりに ―フォリオ12v.についての仮説

すでに見たように、フォリオ12v.は挿絵とテキストの配置に関してこの『フィシオログス』中、例外的な紙葉である。なぜこのような配置にせざるを得なかったのかについては様々な憶測が可能だろう。最後にこの点を考察し、本稿を終わる。

一つの可能性として言えるのは、テキストの文字数と、挿絵のための空間の計算を間違えたのではないか、ということである。もし仮に紙葉一枚分を増やし、ヘビとアリの項目がそれぞれ4項目あるとした場合、挿絵とテキストがどう展開するかを考えてみたのが、参考図1-3である。ベルン写本にはない、ヘビの項目とアリの項目のテキストはY版のテキス

トを引用し、その部分は青色で示している。参考図1にはヘビの第3の性質(裸の人間を襲わない)のための挿絵が描かれ、テキストは挿絵の下に記されていたと思われる。参考図2の紙葉にはヘビの第4の性質のための挿絵とテキスト、アリの第1の性質のための挿絵が描かれ、そのテキストは挿絵の下から、次の紙葉(参考図3)にかけて記されたのではないか。参考図3では、アリの第2と第3の性質についての挿絵とテキストが順に並ぶ。挿絵は文字欄の幅に合わせ、麦の穂が並んでいたのではないか。

しかしこれはあくまで仮説の一つである。再度NO.7と8の項目を取り上げよう。NO.7の本文は「ダビデは見事に語った。私は荒れ野でペリカンのようにであり、廢墟のnocticornusのようにになった」で始まっている。これは「詩篇」101(102)



参考図1



参考図2



参考図3

の7からの引用である。このNO.8の nocticoracus とは何なのか、ここでは、一応「夜の鳥」というところで止めておく。ウルガータ聖書の「詩篇」では nocticoracus は nycticorax と記されており、Y版ではペリカンの項目ではペリカンの部分が、nycticorax についての項目では nycticorax の部分が別々に引用されている。ベルン写本ではこのような配慮が見られない。写本制作の構想段階で、ペリカンの項目と取り違えた、と考えることができる。もしペリカンのための項目が最初の構想に入っていなければ、紙葉の片面分が不足することになる。はたして、手本となった写本ですでに起きていた不手際をそのまま引き継いでしまったのだろうか、ベルン本の制作時に新たに直面した事態だったのだろうか⁽²⁰⁾。

さて、ベルン写本の挿絵は、動物ごとにではなく、項目ごとに描かれていた。そのため、ライオン、ヘビ、アリ、アスピドケローネ、ゾウに関しては複数の挿絵が描かれている。それに対してテキストの量が増えた「動物譜 (Bestiary)」では、挿絵は見出し絵のようになり、一般に各動物ごとに挿絵が一点だけ描かれる傾向にある。その場合でも、やはり相対的な大きさは意識されたようだ。(図6)



図6 アリ オックスフォード、ボドリアン図書館
MS Ashmole 1511, f.36v.

以上見てきた様に、少なくとも「ベルン318写本」の『フィシオログス』におけるテキストと挿絵は、「動物譜 Bestiary」への緩やかな集積へと向かう幾筋もの流れの中にあって、その過程を示す貴重な一例と言える。

註

- (1) 「動物譜 (Bestiary)」については Willene B. Clark, *A Medieval Book of Beasts, The Second-Family Bestiary: Commentary, Art, Text and Translation* (Woodbridge, 2006). 本稿での「動物譜 (Bestiary)」テキストは大英図書館 MS Add.11283 のテキストを指す。『フィシオログス』については、Nikolaus Henkel, *Studien zum Physiologus im Mittelalter* (Tübingen, 1976); Michael J. Curley, trans., *Physiologus* (Austin, 1979); オットー・ゼール『フィシオログス』博品社、1994年など。
- (2) Christoph von Steiger, Otto Homburger, *Physiologus Bernensis: Voll-Faksimile-Ausgabe des Codex Bongarsianus 318 der Burgerbibliothek Bern* (Basel, 1964); Wilhelm R. W. Koehler, Florentine Mütterich, *Die Schule von Reims* (Berlin, 1994), T.1, pp.172-182.
- (3) No.17については後述。No.34は『ヘクサエメロン』第5書24の88-89。Ambrose, *Hexaameron*, Migne, *Patrologia latina*

- 14 (Paris, 1844), cols. 255-256; John J.Savage, trans., *Saint Ambrose; Hexameron, Paradise, and Cain and Abel* (New York, 1961, 1977), pp.223-225. No.35は『語源』第12書1の42-43. W.M.Lindsay, ed., *Isidore of Seville. Etymologiarum, sive originum* (Oxford, 1911 rpt.1990), 2vols.; Stephen A.Barney, W.J.Lewis, J.A.Beach, Oliver Berghof, trans., *The Etymologies of Isidore of Seville* (New York, 2006), p.249.
- (4) 『フィシオログス』のラテン語版についてはCarmodyの校訂本 versioB と versioY が知られている。Francis Carmody, ed., *Physiologus latinus; éditions préliminaires, versioB* (Paris, 1939); Francis Carmody, ed., *Physiologus latinus versioY* (Berkeley, 1944). C版に分類されている写本はこのベルン写本と Wolfenbüttel, Cod.Gud.Lat.148である。*Physiologus Bernensis*, pp.23-27; Henkel, S.26-27. 『フィシオログス』のテキストの分類については、Henkel, S.12-29.
- (5) Kurt Weizmann, ed., *Age of Spirituality* (New York, 1979), pp.215-6. では、ベルン318写本を、5世紀の写本を忠実にコピーした写本と見なしている。
様式についてはHelen Woodruff, *The Physiologus of Bern: A Survival of Alexandrian Style in a Ninth Century Manuscript*, *Art Bulletin* 12 (1930), pp.226-53; Koert van der Horst, William Noel, Wilhelmina C.M.Wüstefeld, *The Utrecht Psalter in Medieval Art, Picturing the Psalms of David* (Utrecht, 1996), pp.190-191.
- (6) Willene B.Clark, pp.202-203; Henkel, S.181-183.
- (7) ヘビの第2の性質 (*Physiologus Bernensis*, p.72) ただし聖書からの引用部分をイタリック体に変換。
“Dominus dicit in Euangelio: Ergo estote prudentes sicut serpentes et simplicis sicut columbae [マタイによる福音書10の16]. Bene Physiologus narrat de eo, quoniam quattuor naturas habet serpens. Haec natura serpentis est: Cum senuerit, calignant oculi eius, et si uoluerit nouus fieri, abstinere se et ieiunare quadraginta dies et noctes, donec pellis eius relaxet, quaerit petram aut fissuram angustam, et inde se coegit transire et tribulat corpus et deponit senectutem et nouus iterum fiet. Sic et homo, si hoc prudentissimum suscipiat serpentem, qui uoluerit ueterem senectutem saeculi deponere, per angustam et tribulatam festinet, primo corpus ieiunia adfligere. Angusta enim uia et tribulata *que ducit ad uitam* [マタイによる福音書7の14] eternam.”
- (8) J.Holli Wheatcroft, *Classical Ideology in the Medieval Bestiary*, Debra Hassig, ed., *The Mark of the Beast. The Medieval Bestiary in Art, Life, and Literature* (New York and London, 1999), pp.141-162. アガトダイモンとしてのヘビの表現については、G.チェルツリ・イレツリ他編『ボンペイの壁画』岩波書店、1991年に多数の例がある。
- (9) Michael J.Curley, “Physiologus,” *Φυσιολογία and the Rise of Christian Nature Symbolism*, *Viator*, 11 (1980), pp.1-10; Curley, (1979), p. xxiv. プリニウスについては『プリニウスの博物誌』雄山閣、1986年、p.365、第8巻41。アエリアヌスについてはAelian, *On the Characteristics of Animals* (London, 1972), p.235, IX-16.
- (10) ヘビの第3の性質 (*Physiologus Bernensis*, p.74).
“Cum uenerit bibere aquam de fonte, non adferet uenenum, sed in foueam suam haec ut in cubili suo deponet eum. Debemus et nos qui festinamus super aquam sempiternam plenum diuinarum caelestium sermonum, in ecclesia non habere nobiscum malitiae uenenum, id est pollutas concupiscentias, sed perfectissimi praecedere.”
- (11) ヘビの第4の性質 (*Physiologus Bernensis*, p.74).
“Quando uenerit homo et uoluerit occidere eum, totum corpus tradit, caput autem custodit. Debemus et nos in tempore temptationis totum corpus tradere, caput autem custodire, id est Christum non negantes, sicut fecerunt sancti martyres. Omnis enim *caput Christus est* [コリントの信徒への手紙一11の3].”
- (12) “Dicit autem Plinius, creditur quod, si serpentis caput etiam cum duobus digitis euerit, nihilominus vivit. Unde et totum corpus obicit pro capite ferientibus,” 『語源』XII.iv 43, Barney, p.258. このプリニウスについての言及は誤り。Cf. クルト・ワイツマン『古代・中世の挿絵芸術』中央公論美術出版、2007年、p.52, [原著: Kurt Weizmann, *Illustration in Roll and Codex* (Princeton, 1947, 1970), p.71]. 『語源』には、ヘビのぬけ替わり、裸の人間を襲わないこと、そして頭部を守ることなど、ベルン写本と同様の内容が記されているのだが、それについての解釈はない。
- (13) アリの性質 (*Physiologus Bernensis*, p.76).
“Quando recondit triticum in terra, diuidit grana eius in duas partes, ne forte hiems comprehendit eam et infundens pluuiam et germinet grana et fame pereant. Et tu uerba ueteris testamenti ad spiritalem intellectum ne quando *littera occidit*. Paulus dixit quoniam *lex spiritalis est*. Solum enim carnaliter adtendentes Iudaei fame negati sunt et homicide facti sunt prophetarum.”
- (14) Carmody, versioY, p.113.
“Et tu, uerba ueteris testamenti diuide ab spiritali uerbo carnalia, ne quando germinat littera, te occidat. Paulus autem apostolus dicit quoniam: *Lex spiritalis est* [ローマの信徒への手紙7の14]; et iterum dicit: *Littera occidit, spiritus autem uiuificat* [コリントの信徒への手紙二3の6]; et iterum: *Que sunt uiuificantia, haec enim sunt duo testamenta* [ガラテヤの信徒への手紙4の24]. Iudei autem solam litteram aspicientes, fame necati sunt; et prophetarum

homicide, sed et dei, facti sunt...”

- (15) Carmody, versio Y, p.112.

“Prima eius natura est: cum ordinate ambulauerint, una queque granum baiulat in ore suo; he quae uacuae sunt, nihil habentes formice, non dicunt habentibus: date nobis granum uestrum; sed uadunt per uestigia priorum, et ueniunt in locum ubi et ille frumentum inuenerunt; et tollentes et ipse, deportant in cubile suum...”

- (16) アリの第2の性質(*Physiologus Bernensis*, p.76).

“Sepius in agro uadit, ascendit in spica in tempore messis et deponit grana eius; priusquam ascendat, adorat deorsum spicam et ab odore magna scit si triticum est aut ordeum. si ordeum est, dimittit eum et uadit super triticum. Est ergo ordeum pecorum esca et accepit triticum quia reponitur in orreo. Ordius enim similabitur aliena doctrina, triticum aequitatem fidei spiritus.”

- (17) 『ヘクサエメロン』第6書4の16の途中からこのテキストは始まる。Ambrose, *Hexaameron*, *Migne*, cols.262-263, John J.Savage, trans., p.236.

“Exigua est enim formica, quae maiora suis audet viribus; neque seruitio ad operandum cogitur, sed spontaneae proposito prospicientiae futura alimentorum subsidia sibi praestruit. Cujus ut imiteris industriam Scriptura commonet de dicens: *Confer te ad formicam, o piger, et aemulare uias ejus, et esto illa sapientior* [箴言6の6]. Illa enim nullam culturam possidet, neque eum qui se cogat habens neque sub domino agens, quemadmodum praeparat escam, quae de tuis laboribus sibi messem recondit; et cum tu plerumque egeas, illa non indiget. Nulla sunt ei clausa horrea, nullae impenetrabiles custodiae, nulli inuolabiles acervi. Spectat custos, furtaque prohibere non audet: aspicit sua damna possessor, nec vindicat. Nigro conuectatur agmine praeda per campos, fervent semitae comitatu uiantium, et quae comprehendi angusto ore non possunt, humeris grandia frumenta truduntur. Spectat haec dominus messis, et erubescit tam parca piae industriae negare compendia.”

- (18) Woodruff, p.248. *Physiologus Bernensis* p.79; Willene B.Clark, p.163-164; Henkel, S.190-191.

- (19) ウェルギリウス『アエネーイス』岩波書店、1976年、pp.241-242.

- (20) nycticoraxがフクロウを指すのか夜ガラスを意味するのか、ここでは立ち入らない。Henkel, S.196-7; Willene B.Clark, *The Medieval book of birds: Hugh of Fouilloys Aviarium* (New York, 1992), p.173, n.1.

【図出典】

図 1, 3, 4, 5 : Christoph von Steiger, O.Homburger, *Physiologus Bernensis: Voll-Faksimile-Ausgabe des Codex Bongarsianus 318 der Burgerbibliothek Bern* (Basel, 1964)

図 2, 6 : *Vollständige Faksimile-Ausgabe im Originalformat der Handschrift Ms.Ashmole 1511 -Bestiarium* (Graz, 1982)

付記 本稿は平成21年度塚本学院研究補助費による研究成果の一部である。